

国語科授業案

日時 平成24年6月5日(火) 5校時
生徒 3年C組 男子18名 女子19名
授業場 3年C組教室
授業者 太田 諭

1 単元名 語句に拘って読もう。「近代の俳句」

2 単元について

(1) 教材観

「言葉」は時代と共にとも変化していくものである。しかし、そこには伝統的に受け継がれてきた「文化」が内在していることから、当然であるが「不易」の部分がある。

我が国において「韻文」は様々な形態が存在し、それぞれが独立した「芸術」として我々の生活に密着しているといえる。本単元において扱う「近代の俳句」は、江戸期の芭蕉に代表される「俳諧」を経て明治期に確立した「俳句」という世界最短の文学が教材となる。また、俳句は日本のみにとどまらず、英語においてもその文化が受け継がれており、我が国の代表的な伝統文化としての高い価値があるといえる。そしてそこには5・7・5という日本人特有の韻律と、短いからこそその「言葉への強い拘り」がある。

教育出版教科用図書「伝え合う言葉」には、自由律俳句2句を含む14句が収められ、いずれも近代の俳句としては代表的な作品であるといえる。前教科書と比較すると、6句が変更され、うち4句は過去の教科書に所収されていたものである。本単元においては、生徒が「俳句の魅力」を実感することがなによりも重要となると考える。そのためには、俳句における「言葉への強い拘り」を生徒に実感させるための手だてが必要となる。

(2) 生徒観

省略

(3) 指導観

以上のことより、本単元においてはまず、「俳句」の基本的事項の確認をすることで、生徒の既存の知識を呼び起こしたいと考える。また、「言葉への強い拘り」を実感する手だてとして、俳句の「部分的穴埋め」をする活動を取り入れる。そこで、穴埋めをするための作品として、前教科書所収の3作品を用いる。そのことにより、教科書を見ていれば書けるという状態を避けることができる。また、穴埋めの箇所を工夫するとともに、ヒントとして、「俳句の説明文」を提示する。

ただし、実際に入っている語句にたどり着くことを目的とはせず、多様な考えを認め、言葉の魅力を実感できるように配慮する。その上で、実際に入っている語句を提示し、「言葉への強い拘り」を実感させたい。

第2時としては、教科書所収の作品について扱っていくが、限られた時間でできる限り多くの作品と関わることができるように、作品の内容把握については「適切なものを選択する」という活動を設定する。その際には、**作品にある直接的な表現に言及しない選択肢**とすることで、生徒が思考力・判断力をはたらかせることができるように配慮する。

最後に、自分が気に入った作品について物語風の文章を作り、交流活動を設定する。そのことにより、生徒個々が俳句から受けるイメージの違いに気づかせ、俳句の魅力を実感させたいと考える。

また、次単元として、「俳句を書く」学習につなげていくことを知らせ、見通しを持たせるとともに意欲化を図りたい。

3 単元目標

「俳句の穴埋め、適切な内容の選択、物語風文章を書く」という言語活動を通して、俳句の語句やリズムの効果に注意して読もうとする態度を培うとともに、俳句に関する基本的な知識を生かし、俳句によって描かれている状況を想像することができるようにする。(※次単元：書くこと「俳句を書こう。」に接続)

4 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
ア 俳句の中の洗練された語句やリズムなどの効果に注意して読もうとしている。	ア 俳句の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読んでいる。 イ 俳句に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と結びつけて解釈している。	ア 俳句の基本的な事項について理解している。 イ 俳句が書かれた背景などに注意して読み、その世界に親しんでいる。

5 単元計画（全3時間）関連する言語活動：俳句を読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること。

時	学 習 事 項	主な学習活動	評 価		
			関	読	言
1 本 時	● 3つの俳句における表現の工夫をとらえる。	○俳句の基本的な知識を確認する。 ○3つの俳句の空欄部分について、説明文をヒントとして適切な語句を自分なりに考え、書き入れる活動を通して、語句の効果的な使い方に対する認識を深める。	ア	ア	ア
2	●教科書掲載の俳句について、基本的事項と描かれている情景を読み取る。	○17の俳句について、季語・切れ字・句切れ・内容を適切に判断する。 ○班で読み取ったことを確認する。		ア	ア
3	●学習した俳句の中から一句を選び、物語風文章を書く。	○学習した俳句の中から一句を選び、その情景が伝わるように物語風の文章を書く。 ○書いた物語風文章を交流する。		イ	イ

6 本時案（1／3時間目）

(1) 本時の目標

俳句の穴埋めをし、交流するという言語活動を通して、俳句における「言葉への強い拘り」を実感し、記述することができる。

(2) 本時の展開

(○…発問、△…補助発問、□…指示・説明)

主な学習活動	教師の働きかけ・手だて	【評価方法】 備考
1 単元の見直しをもつとともに、既存の知識から、俳句の形式について指摘することができる。	○今回の学習は語句に拘りながら「近代の俳句」を読むことです。では「俳句」とはどのようなものでしょう。	ワークシート配布
語句に拘って「近代の俳句」を味わおう。		
2 俳句1に対する説明文から、空欄にあてはまる言葉を考え、その言葉を入れた理由を説明することができる。	○この俳句の空欄には、どのような言葉が入ると思いますか。適切な言葉を入れましょう。また、その言葉を入れた理由を説明しましょう。	机間指導 黒板に掲示 個→一斉 【ワークシート】
俳句① 春浅き水を渡るや鷺一つ 早く・はやく・来る（きたる）など		
3 自分の書き入れた言葉と、その理由を発表することができる。	□では、発表してもらいます。	計画指名→挙手

<p>4 俳句2に対する説明文から、空欄にあてはまる言葉を考え、その言葉を入れた理由を説明することができる。</p>	<p>○この俳句の空欄には、どのような言葉が入ると思いますか。適切な言葉を入れましょう。また、その言葉を入れた理由を説明しましょう。</p>	<p>机間指導 黒板に掲示 個→一斉 【ワークシート】</p>
<p>俳句② 岩に爪たてて空蝉泥まみれ 抜け殻・蝉の子 など</p>		
<p>5 自分の書き入れた言葉と、その理由を発表することができる。</p>	<p>□では、発表してもらいます。</p>	<p>計画指名→挙手</p>
<p>6 俳句3に対する説明文から、空欄にあてはまる言葉を考え、その言葉を入れた理由を説明することができる。</p>	<p>○この俳句の空欄には、どのような言葉が入ると思いますか。適切な言葉を入れましょう。また、その言葉を入れた理由を説明しましょう。</p>	<p>机間指導 黒板に掲示 個→一斉 【ワークシート】</p>
<p>俳句③ 雨がちに端午ちかづく父子かな 五日・いつか・心 など</p>		
<p>7 自分の書き入れた言葉と、その理由を発表することができる。</p>	<p>□では、発表してもらいます。</p>	<p>計画指名→挙手</p>
<p>8 3つの句のうち、最も語句が効果的に使われていると思う句を選び、感想を交流することができる。</p>	<p>○3つの俳句のうち、最も語句が効果的だと思う句はどれですか。</p>	<p>【ワークシート】</p>

「筆者の考え」を読みとろう。ワークシート③

言葉は変わっていく〇〇〇

清水義範

言葉というのは時とともに変化するというの□事実だ。変化するからこそ、もともとの形を残したい。残さないのは日本語の乱れだ、という気□するのだが、場合によっては、今はもうそういう言い方はしないよね、その言い方は古くさい、というような① カンソウ になること□ある。そんなところで、まさしく言葉は生きているのだ。

「かわいい子には旅をさせよ」ということわざを、② サイキン の若い人は、かわいい子には旅をさせて、③ ケンブン を広めさせ、いい④ タイケン を積ませてやろうよ、という意味だと思ってるそうだ。

これは、今と昔とでは旅のイメージが大きく変わっているからしかたがないと□言えるのだが。昔は、旅をするというのは大変なことで、水さかずきを交わしたぐらいのものであり、親もとを離れて大いに苦労をしたのだ。だからこのことわざは、かわいい子だからこそ⑤ セケン に出して苦労させなくちゃ、というニュアンスだった。

でも、時代が変わればことわざの受け止め方だって変化していった。□でも、
高校生の作文のコンクールの審査員しんさいんをしていた時のこと、ある年の課題で、「百聞と一見」というのがあった。「百聞は一見に如かず」ということわざをふまえて、そのどっちがいいのか、ゲーム的にデベートしてごらん、という課題だ。

ところがそのテーマに対して、高校生の多くが、⑥ シカク 情報と聴覚情報はどっちが確かか、という論考をするので驚いてしまった。テレビより、⑦ アンガイ ラジオのほうが真実が伝わったりする、なんていう論だ。

違うんだけど、とわたしは思った。聞く、というの、ひとに聞くことであり、伝聞なのだ。そして見るというのは、自分がその目で見ること。つまりあのことわざは、伝聞よりもジッタケンのほうがよくわかる、ということをしているのである。テレビで戦争の様子を見るのは、むしろ百聞のほうであり、その⑧ センチ へ⑨ ジツサイ に行ってみるのが、一見である。

しかしまあ、テレビのない時代のことわざにはテレビで見ることまでは考えられてなくて、ただ、目か耳か、という話になって□のも⑩ ムリ はない。そうやって、ことわざの意味もニュアンスが変わって□のだ。

「筆者の考え」を読みとろう。ワークシート②

今どきの言葉づかい 金田一秀穂

おしゃべりに使う言葉には、流行語といわれるものがある。若者どうしのおしゃべりには欠かせないものである。流行語を使うことよってしか伝えられない彼らの気持ちがある。おしゃべりについて考えるとき、彼らの言葉を① ムジ できない。

日本人の大学生にも日本語学などを教えている手前、彼らとおしゃべりは、わたしにとって研究のネタの大事な② シムバ の場でもある。

しかし、若者の言葉づかいについて、いろいろ③ ヒハンテキ にいわれることがある。「言葉の乱れ」とか「日本語を破壊するもの」とか。

言葉は変化することが④ ホンシツ である、と昔の偉い言語学者が言っている。変化するけれど、だれかが変えようと思っても、変えることはできない。逆に、変化させまいとしても、そのままの形で保たせることは決してできない。

そうであれば、彼らの言葉を一方的にダメなものとして見るのではなく、言葉のおもしろさを表すものとして考えることもできるだろう。

それに、流行語というのは、全く新しい言葉ではない。たいていの場合、それは以前にもあった言葉の新しい使われ方であることが多い。「等身大」とか「変革の時代」というのは昔にもあった。少し使われ方が変わっただけで、全く新しい語を作り出すことはできない。恐れるに足らない。

⑤ ユダ 新しい語を今までの日本語に増やすということを考えると、外来語とか流行語は、日本語が ユダ かななるというように考えることができるのだから、むしろ望ましいことなのかもしれない。

ら抜き言葉というのが問題になって久しい。「食べられる」というべきところを「食べれる」と言ってしまう。「見れる」や「来れる」もら抜き言葉である。これについてはいろいろな議論があるが、わたしはら抜きでもかまわないと思う。ら抜き言葉は⑥ タイイユウジダ から現れていて、今に始まったことではない。自然の趨 すうせ 勢 せい である。ら抜きを⑦ イシキ するあまり、「帰る」の可能性を「帰られる」にし、「行く」を「行けられる」にしてしまうほうが問題であろう。

「すごい暑い」という言い方は、本当は「すごく暑い」でなければならなかった。ちょっと小難しい言い方をするとき、「すごい」は形容詞であり、用言を修飾するときには（動詞や形容詞の前にくるときには）、「すごく」という連用形にしなければならぬというきまりがある。ただ「すごい」という副詞が新しくできたのだと考えれば、「すごい暑い」は文法的に正しいということになる。

言葉が乱れているというより、言葉が変化していると考えの方がいいのではなからうか。

この文章の「筆者の考え」をまとめよう。

「 や 」 は日本語が 「 」 になると考えることができる。むしろ 「 」 ことかもしれない。

日本語は、 「 」 というより 「 」 と考えるべきだ。

「言葉を考える」構想

昨年「乱れ」か「変化」かという書くことにつなぐ実践を行った。

その結果、「変化」と捉える生徒が多いことに衝撃を受けた。しかし、よく考えれば当然である。なぜなら、そもそも「乱れ」「変化」の二元論で捉えること自体に無理があるのである。明らかな「乱れ」と捉えられ、使うべきでない言葉「ウザい」「キモい」「むかつく」「消えろ」「死ね」などの言葉と、変化と捉えてもやむなしとする言葉「ら抜き」「すごい～」等は、次元の違うものなのである。

今回「言葉について考える」を行うにあたっては、言葉の乱れと変化を自分なりに分析することを行わせたい。そのことによって、言語感覚が人それぞれ違うことに気付き、自らの言語感覚が適切なものであるのかを判断させたいと考える。

教材観

言葉に対する三者の立場

清水氏 言葉が変化することに対して否定的ではあるが、しかたがない面もあると述べる。

指導事項の重点化

中学校1年生 説明的文章における指導事項

要旨 言いたいこと・大体的内容→要約と変わらぬ

要約

昔は、旅をするというのは大変なことで、水さかずきを交わしたぐらいのものであり、親もとを離れて大いに苦勞をしたのだ。だからこのことわざは、かわいい子だからこそ世間に出して苦勞させなくちゃ、というニュアンスだった。

高校生の作文のコンクールの審査員をしていた時のこと、ある年の課題で、「百聞は一見に如かず」ということわざをふまえて、そのどっちがいいのか、ゲーム的にディベートしてごらん、という課題だ。

ところがそのテーマに対して、高校生の多くが、視覚情報と聴覚情報はどっちが確かか、という論考をするので驚いてしまった。テレビより、案外ラジオのほうが真実が伝わったりする、なんていう論だ。

違うんだけど、とわたしは思った。聞く、というのは、ひとに聞くことであり、伝聞なのだ。そして見るというのは、自分がその目で見ること。つまりあのことわざは、伝聞よりも実体験のほうがよくわかる、ということを知っているのである。テレビで戦争の様子を見るのは、むしろ百聞のほうがであり、その戦地へ実際に行ってみるのが、一見である。

本語の変化に対して、 的である。

ことがわかる。

形だけが強さを奮う例

制服

ブランド品

も から捉えられるニュアンス

しまう から捉えられるニュアンス

テレビの影響で、変なしゃべり言葉が浸食してきている。

指示語・接続語のとらえ方

指示語より前から探す

指示語と置き換える

前後の文の関係をつかむ。

接続語の働きを理解する。

語句・細部のとらえ方 1

要点・段落のとらえ方 3

四つに入る言葉 も
三つに入る言葉 しまう

足が棒になる
骨が折れる
目と鼻の先
手を貸す
涼しい顔
口がかたい
耳を疑う
胸がつぶれる
腹をわる
歯牙にもかけない
舌の根も乾かぬうち
開いた口がふさがらない
奥歯に物のはさまったような

犬猿の仲
袋のねずみ
瓜二つ

立て板に水
蟻のはい出るすきまもない
大船に乗った気持ち

板につく
けりがつく
物言いがつく
王手をかける
一目置く

道草をくう
棚に上げる
気にくわない
隅に置けない
取るに足らない

情けは人のためならず
気のおけない
二の足を踏む
二の舞を演ずる

視点1・

視点2・
漢字確認

視点3・
班による交流活動の設定

視点4・ 日本語に関するアンケートの実施

も から捉えられるニュアンス

しまう から捉えられるニュアンス

どんなに新聞や本で「日本語の乱れ」を憂慮しても、テレビの影響力の前には無力かもしれません。今やテレビは、多くの人にとって隣人、友人のような存在です。それが証拠に、「だれにも言えない悩み」をテレビでならうち明ける、なんてかたも珍しくはありません。しかしながら、テレビがよき「教師」であるかというところかなり疑問があるのも確か

です。

しゃべる日本語を考えるうえで、まずは、テレビから出てきて、いつのまにかわたしたちの日常生活まで浸食してきた「変なしゃべり言葉」をみていきましょう。

「材料をおさらしておきましょう。こちらになります。」

お料理番組で最後、「作品」ができあがったあと、みんなで試食する前に、司会者がこんなふうに言っていました。さらっと聞き流せばなんということもない言い方ですがわたしにはちょっと引っかかってしまうのです。

ファミリーレストランのウェイトレスが料理を運んできて「こちらポークソテーになります。」ぐらいなら我慢もできますが、いやしくも公共の電波でものを言う人間がフリップを指さして「材料はこちらになります。」「お店の場所はこちらになります。」「電話番号はこちらになります。」「料金はこちらになります。」ってそれはないでしょう。

なんでもかんでも「なります」を使おうというのは、「です」では、はっきり言いきる感じが冷たく聞こえやしまいか、言葉が短くて間がもたないんじゃないか、丁寧な感じが不足するんじゃないか、相手がこちらに敵意を抱きはしないか、と卑屈になって、とりあえず無難に、という軟弱な心理が見え隠れしているように感じられます。

「電話番号はこちら、〇〇〇の〇〇〇〇です。」とずばっと、明確に、潔く、しかもそれでいて聞き手を敬うように、メリハリと間をきかせて、丁寧な雰囲気伝えるのがプロというものです。ある程度年齢のいったかたなら、「ございます」という表現も使ってほしいものです。「ございます」なんて大時代な言葉はとてとても、というあなた。軽い調子で滑らかに発音すれば、意外と使い勝手のいい言葉として活用できるんですよ。

「こちら味噌ラーメンになります。」と「こちら味噌ラーメンでございます。」

あなたはどちらの店で食べたいですか？

「こちらが材料になります。」と「こちらが材料です。」「こちらが材料でございます。」

あなたはどちらの番組を見たいですか？

おしゃべりに使う言葉には、流行語といわれるものがある。若者どうしのおしゃべりに欠かせないものである。流行語を使うことによってしか伝えられない彼らの気持ちがあがる。おしゃべりについて考えるとき、彼らの言葉を見捨てることはできない。

日本人の大学生にも日本語学などを教えている手前、彼らとのおしゃべりは、わたしにとって研究のネタの大事な取材の場でもある。

しかし、若者の言葉づかいについて、いろいろ批判的にいわれることがある。「言葉の乱れ」とか「日本語を破壊するもの」とか。

言葉は変化することが本質である、と昔の偉い言語学者が言っている。変化するけれど、だれかが変えようと思っても、変えることはできない。逆に、変化させまいとしても、そのままの形で保たせることは決してできない。

そうであれば、彼らの言葉を一方的にダメなものとして見るのではなく、言葉のおもしろさを表すものとして考えることもできるだろう。

それに、流行語というのは、全く新しい言葉ではない。たいていの場合、それは以前に

もあつた言葉の新しい使われ方であることが多い。「等身大」とか「変革の時代」というのは昔にもあつた。少し使われ方が変わっただけで、全く新しい語を作り出すことはできない。恐れるに足らない。

新しい語を今までの日本語に増やすということを考えると、外来語とか流行語は、日本語が豊かになるというように考えることができるのだから、むしろ望ましいことなのかもしれない。

ら抜き言葉というのが問題になって久しい。「食べられる」というべきところを「食べれる」と言ってしまう。「見れる」や「来れる」もら抜き言葉である。これについてはいろいろな議論があるが、わたしはら抜きでもかまわないと思う。ら抜き言葉は大正時代から現れていて、今に始まったことではない。自然の趨勢である。ら抜きと意識するあまり、「帰る」の可能形を「帰られる」にし、「行く」を「行けられる」にしてしまうほうが問題であろう。

「すごい暑い」という言い方は、本当は「すごく暑い」でなければならなかった。ちょっと小難しい言い方をすると、「すごい」は形容詞であり、用言を修飾するときには（動詞や形容詞の前にくるときには）、「すごく」という連用形にしなければならないというきまりがある。ただ「すごい～」という副詞が新しくできたのだと考えれば、「すごい暑い」は文法的に正しいということになる。

言葉が乱れているというより、言葉が変化していると考え方がいいのではなからうか。